

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★



Data

監督：張黎（チャン・リー）
総監督：ジャッキー・チェン
出演：成龍（ジャッキー・チェン）
／趙文瑄（ウインストン・チャオ）
／李冰冰（リー・ピンビン）
／胡歌（フー・ゴー）
／房祖名（ジェイシー・チャン）
／陳沖（ジョアン・チェン）
／孫淳（スン・チュン）
／姜武（ジャン・ウー）
／寧靜（ニン・チン）
／余少群（ユイ・シャオチュン）

👁️👁️ みどころ

台湾でも中国でも、今年10月10日を「辛亥革命100周年」として祝ったのはなぜ？ジャッキー・チェンが100本目の記念作とした、本作の主人公黄興とは一体ダレ？1868年の明治維新から約150年を経た今の日本も、あらためてその歴史を学ばなければ・・・。

「革命は武装蜂起から」は世の常だが、共和制と三民主義を熱く語った孫文が構想した「この国のかたち」とは？奇しくも本稿執筆の10月21日にはカダフィ大佐が死亡したが、リビアの新しい国づくりにも心を馳せながら、激動の中国史を本作でじっくりと。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■新聞各紙は、「辛亥革命100周年」一色に！■□■

中国の歴史に興味を持ち、2000年8月には瀋陽にある「9・18記念館」を訪れたことのある私は、2011年の9月18日は満州事変の発端となった柳条湖事件80周年にあたることを知っていたから、きっと中国では大規模な式典が行われるはずだと思っていた。案の定この日、遼寧省の瀋陽市では東北3省共催の記念式典が開催されたが、それについての日本の新聞記事は意外に少なかった。それに対し、9月、10月の新聞各紙は「辛亥革命100周年」の記事一色となり、それぞれ詳しい特集を組んだ。とりわけ、産経新聞は7月18日から10月11日まで「孫文の志 未だ成らず 辛亥革命100年」の特集を11回にわたって連載した。

そして、台湾の台北では、「双十節」と呼ばれる10月10日に兵員約1800人と戦闘機、戦車、ミサイルを動員した過去最大規模の軍事パレードを中心に「中華民国建国10

0年」を祝う盛大なイベントが開催された。他方中国（本土）では、武漢に完成した辛亥革命博物館で10月8日に盛大な式典が行われると共に、北京の人民大会堂では胡錦濤・共産党総書記が、孫文が「統一は全中国国民の願いだ」と述べたことを引用し、「平和的に統一を実現することは、台湾同胞を含む全中国人の根本的な利益に最も合致している」などと演説した。ちなみに、約48億円を投じて建てられたこの博物館は、辛亥革命に関する博物館としては最大で15日から一般に無料開放されるとのことだから、是非1度訪れてみなければ・・・。

ところで、あなたはなぜ10月10日が「辛亥革命100周年」の日とされているか知ってる？それは、清王朝の打倒を目指して立ち上がった湖北省の「武昌蜂起」（現在の武漢）から清朝の崩壊が始まったためだ。しかして、なぜ武装蜂起の成功は武昌で？それを指導したのは誰？後に三民主義を説き、中華民国の初代大統領となった孫文（ウインストン・チャオ）は日本でも宮崎滔天や梅屋庄吉らから大きな支援を受けたが、それは一体なぜ？また、ジャッキー・チェンが100本目の主演作として演ずる本作の主人公黄興は日本人にはなじみが薄いですが、彼は一体どんな人物で、どんな役割を？

■□■あちらは異色だったが、こちらは本格派！■□■

辛亥革命100周年を狙って（？）ひと足先に公開されたのが、陳徳森（テディ・チャン）監督の『孫文の義士団（十月圍城）』。これは1906年10月15日に香港で開催される1時間の会議に、何が何でも孫文を出席させるために命をかけて戦う義士団たちの姿にスポットライトを当てた異色作で、歴史大作ではなくエンタメ巨編として最高の出来だった（『シネマルーム26』143頁参照）。それに対して本作は、孫文の盟友である黄興を総司令官とする革命軍と、清王朝のラストエンペラーとなった宣統帝溥儀及びその母親・隆裕皇太后（ジョアン・チェン）を頂点とする清王朝との対決を中心としながら、その間で微妙かつ重要な役割を果たした清朝軍を掌握する謀略の天才・袁世凱（スン・チュン）を絡ませた歴史大作。

本作は、冒頭に辛亥革命に至るまでの西欧列強の中国進出と、その中で中国人民がいかにかに苦しめられていたかという歴史的背景を説明するナレーションが登場するが、当然それには賛否両論があるだろう。しかし、私は「辛亥革命100周年」を理解するためには最低限これくらいの知識は不可欠だと考えているから、このナレーションに賛成！

■□■武昌蜂起の成功の前には、数々の悲劇が・・・■□■

本作は歴史大作だが、それを2時間にまとめるためには、武昌蜂起の成功に至るまでの清朝打倒のために立ち上がった若者たちの動きをわかりやすくまとめることが不可欠。武昌蜂起の成功までには、1985年から1911年にかけて広州起義、惠州起義、黄岡起義、安徽起義など計10回の武装蜂起があったが、これらはすべて失敗に終わり、それぞ

れ大きな犠牲を払ったというのが歴史的事実だ。

そこで本作冒頭には、安徽省安慶で武装蜂起しながら、それに失敗して捕えられ処刑される秋瑾（ニン・チン）の姿が登場する。日本への留学経験を持つ女性革命家で、31歳の若さで処刑され、後に「革命の女神」と称された秋瑾は「秋風秋雨、人を愁殺す」という遺句が有名だし、杭州・西湖畔には秋瑾像が建てられている。私は①04年3月31日～4月3日の杭州旅行と②06年3月16日～3月20日の上海・杭州・烏鎮・無錫・鎮江・揚州・蘇州・周庄旅行の際にその話を聞かされて感動したが、そんな秋瑾を『哀戀花火』（93年）で強く印象に残った（『シネマルーム17』404頁参照）貴州省出身の美人女優ニン・チンが演じている。さらに本作前半には、武昌蜂起の前に黄興が指導した黄花岗の蜂起で、革命軍が清朝軍の武力の前に敗北する姿が描かれる。そこで倒れた多くの若者たちのうち、後に黄興の妻となる徐宗漢（リー・ビンビン）たちの努力で引き上げられた遺体が「黄花岗七十二烈士」だが、日本人はこういう話はどうといはず。

1911年10月10日の武昌蜂起成功の前にこんな数々の悲劇があったという歴史的背景を、私たち日本人もしっかりと理解しなければ・・・。

■西太后は有名だが、隆裕皇太后は？また袁世凱は？■

清朝最後の皇帝となった宣統帝溥儀が後に満州国の初代皇帝になったことはアカデミー賞9部門を受賞した『ラストエンペラー』（87年）などで有名。また、田中裕子が西太后を演じたNHKドラマ『蒼穹の昴』も有名だから、日清戦争（1894～95年）から戊辰の政変（1898年）そして義和団の乱（1900年）へと至る清朝末期の動乱時代に、西太后が果たした悪しき役割（？）はよく知られている。しかし、西太后が1908年に死亡した後の1911年に起きた武昌蜂起当時、西太后の姪である隆裕皇太后がまだ幼い宣統帝溥儀の嫡母として後見していたことや、日本の「大政奉還」（1868年）に相当する（？）「退位」という決断を彼女が下したことは、あまり知られていないのでは？

他方、袁世凱という人物は、『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）にも登場する（『シネマルーム5』107頁参照）し、私が7月26日に対談した、アジアで最もノーベル文学賞に近い中国人作家莫言が書いた小説『白檀の刑』にも登場する有名な人物だが、こいつはものすごい曲者。隆裕皇太后から革命軍討伐を命じられた袁世凱は、一方で孫文や黄興と対決しながら、他方で隆裕皇太后に対してフランスのルイ16世やマリー・アントワネットのようにギロチンにかけられないように、と巧みに退位を迫ったが、さてその狙いは？日本人は幕末から明治維新に至る「権力闘争」の様子はよく知っているが、中国の辛亥革命による清朝の崩壊や「中華民国」建国の過程における権力闘争の様子もあまり知らないはずだから、本作を観てそれをしっかり勉強しなければ・・・。

■革命には膨大なカネが！その調達係は？■

去る10月6日東京地裁で「政治とカネ」をめぐる小沢一郎の法廷闘争が開始されたが、政治や選挙に膨大なカネがかかることは、現在アメリカで展開されている大統領選挙（の前哨戦）を見ても明らかだ。また、革命を抑えるためにも膨大なカネがかかることは、長州や薩摩に対抗する大砲や軍艦を買うために徳川幕府がフランスに援助を求めたことを見ても明らかだが、西洋列強がアジアの国の政府側や反政府側に資金援助するのは、その後の利権を期待したものでは？

今イギリス・フランス・ドイツ・アメリカの4国で結成した対華借款団（四国借款団）は清朝に資金提供しようとしていたが、それは近い将来中国での利権を狙ったものであることは明らかだ。せっかく武昌蜂起を成功させても、この資金援助を受けて清朝の反撃が開始されれば、脆弱な革命軍などひとたまりもない。そう考えた孫文はアメリカから中国への帰国を選ばず、イギリスに渡って四国借款団が革命軍に援助すべきことを説得することに。ここに至って、現場での戦闘は黄興が、外交と資金調達に孫文が、という役割分担が確立したわけだ。幕末から明治維新にかけて、土佐の坂本竜馬は反徳川勢力＝革命勢力でありながら犬猿の仲だった薩摩と長州の手を結ばせた「薩長連合」の功績が讃えられているが、それ以上に彼の個性が際立っているのは、海援隊をつくり外国との交易を盛んにしてカネもうけをしようと考えたこと。何でもカネ、カネ、カネの時代となって、格差が増大していく資本主義社会への不満が、現在世界各国の若者のデモとして吹き荒れているが、革命に膨大なカネがかかることは明らかだ。さあ、その資金調達をまかされた孫文のバンカーたちに対する名演説の数々を、本作でタップリと。

■□■初代のトップは誰が？■□■

10月21日、リビアを42年間にわたって支配していた独裁者カダフィ大佐の死亡が伝えられたため、反カダフィ派の組織である「国民評議会」を中心として臨時政府の樹立が加速されるはずだ。しかし、リビアに先立って解放されたアフガニスタンではタリバン政権の崩壊によって、イラクではサダム・フセイン政権の崩壊によって、それぞれ臨時政府が樹立されたが、いずれもその基盤はまだまだ脆弱だ。さて中国では、武昌蜂起以降革命軍が勢力を強める中、袁世凱の進言（？）もあって隆裕皇太后は退位を決断したが、さあ帰国した孫文を迎える中国の臨時政府は誰の手でどのように樹立されるの？

自由・平等・博愛を旗印としたフランス革命がルイ王朝を打倒し共和制を目指したのと同じように、辛亥革命は清王朝を倒し共和制を樹立することを目指したのだから、臨時政府のトップは国民の民主的選挙で選ばれるのが当然。その結果、孫文が中華民国初代の臨時大総統に選出されたわけだが、さてその選出の方法は？今からみれば、それは極めて不十分な選出方法であったといわざるをえないが、それでもその当時においては最も民主的な方法であったことはまちがいない。ところが、それに大きく異議を唱えたのが袁世凱。袁世凱の猛反撃を受けて、孫文は宣統帝溥儀の退位と引き換えに大総統を辞任するとの方

針を表明したが、さてその是非は？

■□「この国のかたち」を、いかに？■□

台湾と中国（本土）で盛大に開催された「辛亥革命100周年」の式典を見ていると、両者とも孫文を「国父」としながら、現在の政治体制の相違は明らか。1年毎に内閣総理大臣がコロコロと代わったわがニッポン国では、毎年のように総理大臣を中心に閣僚が勢ぞろいする写真が撮影されていたが、それは新生中国も同じ。初代大総統となった孫文を真ん中に、黄興たち重要閣僚（？）が勢ぞろいした写真が撮影されたが、さてその後の「この国のかたち」は？大政奉還によって明治維新が成し遂げられたのと同じように、辛亥革命によって清王朝が打倒され中華民国が成立したが、その後の「この国のかたち」を定めるについては、さらなる革命が必要だったのも日本と同じ？本作は君主制に代わる共和制の意義と、「民族・民生・民権」という「三民主義」を熱っぽく説く孫文の演説でクライマックスを迎えて終わるが、辛亥革命成功後の中国のさらなる革命とは？

本作を観るだけでも袁世凱の曲者ぶりは明らかだが、現実の歴史では孫文に代わって臨時大総統の地位に就いた袁世凱が革命勢力を弾圧し始めたため、孫文や黄興はふたたび「第二革命」を起こすもこれに失敗し日本へ亡命することに。さらに、フランス革命後の混乱を收拾したナポレオンが皇帝に就任したことを彷彿させるように、袁世凱が皇帝に就任するという暴挙を行ったため、革命軍はさらに「第三革命」を各地で起こすことに。そして、列強各国からの反対の声や、配下にあった北洋軍閥の支持も得られない中袁世凱は帝政取消を宣言し、帝位受諾からわずか83日で退位を迫られ、失意の中で病没したため、その後の中国は軍閥と革命勢力と日本などの列強が入り乱れる混沌の時代へと突入した。さあ、1911年10月10日武昌蜂起の成功＝辛亥革命は成功したが、その後「この国のかたち」はいかに？

2011（平成23）年10月14日記



ロンジモント上海ホテル（上海龍之夢麗晶大酒店）37階から、眼下のビル群を
(2011.11.5)



美しくライトアップされた浦西の建築群をバックに、黄浦江クルーズの船内で
(2011.11.5)

「ニッポン前へ委員会」への応募論文は？

1) 2011年3月11日に発生した東日本大震災から1カ月後の4月10日。朝日新聞は「ニッポン前へ委員会」を設立し、①東日本復興計画私案、②これからのエネルギー対策、をテーマとして、明日の日本を構想する提言論文を募集した。時あたかも菅直人首相の外国人献金問題で菅政権は崩壊寸前だったが、菅前首相は持ち前のしぶとさであれやこれやのパフォーマンスをくり広げた。しかし、それがすべて裏目に出たことは誰の目にも明らかだ。

2) 1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災に伴う震災復興まちづくりに奔走した私は、地震・津波・原発事故という三重苦の大災害の前に復興対策が遅々として進まない状況にイライラ。しかして、ある夜眠っている時にパッとひらめいたアイデアがあった。①内容良し、②タイミング良し、③弁護士という専門家としての提言もあり。こりゃ最優秀賞まではいかなくても、入選狙いは十分可能。そう考えてアイデアを練り、推敲を重ねて5月10日に提出したのが、400字詰め原稿用紙20枚の論文。そのタイトルは「震災復興担当大臣を国民投票で！」というものだ。

3) その目次は次のとおりだ。

- ① 議員内閣制と二院制は機能しているか？
- ② 今こそ衆参同日選挙を！しかし・・・

- ③ 震災復興担当大臣を国民投票で！
- ④ 「復興相指名国民投票法」案の内容は？
- ⑤ 復興相の意義は？役割・人事権は？
- ⑥ 新たな民主主義の地平下で震災復興を！

⑦ おわりに

その発表を今か今かと待っていたが、それは7月18日。合計1745本の応募作から最優秀賞など計10本が選ばれたが、残念ながら私の論文は落選！

4) 私は朝日新聞主催の「朝日21関西スクエア」の会員として会報に寄稿したり、交流会・懇親会に参加している。月1回発行される会報も今やNO.138だから立派なものだが、2011年9月26日に開催された懇親会の中で、出席の論説委員に対して、なぜ私の論文が不採用になったのかという私の質問が炸裂した。これは、阪神・淡路大震災の時に親しく交流していた記者たちが、今や論説委員に出世しているという気安さもあってのことだが、さてその反応は？

4) 6月27日に菅首相から任命された松本龍震災復興担当大臣が、失言問題でわずか9日間で辞任したうえ、その跡を継いだ平野達男が全く存在感を示していない状況や、復興庁の設置が遅々として進まない現状をみると、やはり私の論文のように震災復興担当大臣は国民投票で選出しなければならないのでは？

2011（平成23）年11月9日記